

## 2021年9月5日 説教「わたしが道です」

ヨハネの福音書 14章 1～6節

今月は、三回にわたってヨハネの福音書 14章から学んでいきます。

### 1. キリストが父の家に行く理由 (1～2節)

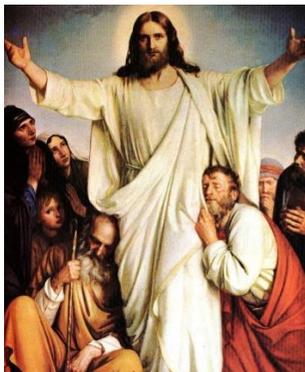
①心を騒がせず (1)「あなたがたは心を騒がしてはならない。神を信じ、またわたしを信じなさい。」イエス・キリストは十字架を目の前にして、弟子達に自らの受難について、語り始められています。ろばに乗ってエルサレムに入城してから、例えばこのようなことを言われています。「人の子は栄光を受けるその時が来ました。・・・一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのみかたです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。」(12:23～24)。これは明らかに、ご自分が犠牲となって死なれることを暗示しておられるのです。また、弟子達の足を洗うという印象的な出来事もありました(13章)。キリストの言われることを聞きながら、弟子達の中には不安も生じ始めていました。ペテロは「主よ。どこにおいでになるのですか。」とたずねています(13:36)。そこで、主は言われたのです。「あなたがたは、心を騒がしてはならない」。心を騒がせるというのは、人間的な考えに陥ることです。神の存在や御約束や導きを信じられない状態です。要するに不信仰になることです。だからこそ、主は「神を信じ、またわたしを信じなさい」と言われるのです。父なる神を信じて仰ぎ、執り成してくださる御子イエス・キリストを信じることによって、心はあるべきところにもどされるのです。

②父の家の住まい (2)「わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言うておいたでしょう。」イエスは「父の家」について語っています。天の御国のことです。そこには、住まいがたくさんある、と言っています。つまり、「キリストを信じる者は死んでも生きる」とイエスは言いましたが、天に召された信者が御国において憩う場所はたくさんあるということです。天の住まいが足りないのではといった心配の必要はない、ということです。

③場所を備えに (2)「あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。」イエスは、どこかに行かれることを暗示しておられました。それは、弟子達をはじめとした主に従う者たちのために、天に行かれるということを言われています。その目的は、主の民のための住まいである場所を備えるためであることを述べられます。

### 2. 場所を備えたなら (3～4節)

①また来られる主 (3)「わたしは行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。」ここにイエス・キリストは、一度は天に行かれること、そしてやがてはもう一度来られることを示しておられます。主がもう一度来られることは、再臨と言われますが、テサロニケ人への手紙第一などに預言されています。



その時に、信者は主イエスによって迎えていただくのです。

②主と共にいるために (3)「わたしのいるところに、あなたがたもおらせるためです。」人間にとって何が幸せか、という問いがあります。最上の喜びと平安は、キリストがともにいてくださるところにあります。いかなる事態のなかにも、主が備えと導きを与えてくださるからです。

③主の行く道 (4)「わたしの行く道はあなたがたも知っています。」さて、キリストはこれから行かれる場所、御国への道について語られます。そして言われるのです。「わたしの行く道はあなたがたも知っていますね。」と。ここでイエスは行く所ではなく行く道について語られます。つまり、どのようにしたら、主の行く所に到達することができるかということについて示そうとしてみてください。それは誰しもが知りたいところです。

### 3. わたしが道、真理、いのち (5~6 節)

①トマスの問い (5)「トマスはイエスに言った。『主よ。どこへいらっしゃるのか、私たちにはわかりません。どうして、その道が私たちにわかりましょう。』」その道について、あなたがたは知っていますねと問われて、「わからない」と正直に答えた弟子がいました。トマスです。これより先のことですが、キリストが復活して弟子達の前に現れた時にトマスは不在でした。そこで、復活の報告を受けても、見て、触ってみなければ信じないと述べたその人です。14 章でも、トマスは彼らしい返答をしています。「どこにいらっしゃるかわかりません。」「その道についてもわかりません。」と言いました。御国についても、よくわからないし、どのようにしてそこに行くのかについてもわからないわけですから、それを率直に述べたわけです。

②キリストのお答え (6)「イエスは彼らに言われた。『わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。』」するとイエスは、ある面では大変驚くべきことを伝えられるのです。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。」と。エゴーエイミ (わたしが~です) の一つです。ただ、ここではご自分について、三つのことをまとめていわれています。今までは、「いのちのパンです」「世の光です」「羊の門です」「良い牧者です」「よみがえりです」と語られましたが、今回は三つを並べて、「道です」「真理です」「いのちです」と明らかにされています。この三つについては、関連性があるというよりも、御国に至るためにどうしても受け入れ、理解し、信じていかなければならない項目を言われているように考えられます。これは、トマスの質問に対して、弟子達の肺腑をつくような解答となり、イエスが誰であるかをわからせようとするお言葉でありました。

③キリストを通して (6)「わたしを通してでなければ、だれひとり父の

みもとに来ることはありません。」そして、イエスは「わたしを通して出なければ、父のみもとに来ることはありません。」と述べられています。父のみもととは、2 節で言われている「父の家」のことです。御国のことです。御国に入っていくには、イエス・キリストを通していくしかない、とキリストご自身が明言されているのです。

《結論》 今朝は、キリストが「わたしは道であり、真理であり、いのちです」と言われた点から学びます。三つのことが一気に語られました。どれもが大きなテーマです。そこで、今朝は最初の一つだけをとりあげて学んでいきたいと思えます。「わたしが道です」。この言葉を読めば、まず思い浮かべるのは、通り道であり、道路でしょう。最近では市原でも新しい道ができて、五井までの距離が少し短くなりました。道路というのは便利です。荒地に道路ができれば、目的的に早く着きます。でこぼこ道が舗装されれば、車も人間も通りやすくなります。「すべての道はローマに通ず」という言葉は、ローマ帝国の支配する時代において、国の発展のために道が役割を果たしたことを物語っています。

一方で、「道」という言葉は、日本語はもちろん、外国語でも聖書原語でも、たとえとして用いられます。たとえば、「マイウェー」という歌のウェー (way) は道です。「自分が歩いて来た道」、つまり「私の人生」といった意味で用いられています。讃美歌 494 にある「わが行く道 いついかに」というのも、自分の将来の人生といった意味でしょう。

また、日本では「道」というと、柔道、剣道、弓道といったスポーツから、書道、華道、茶道なども「道」とされます。ですから、「道を究める」などという言葉もあるのです。そして、キリスト教の世界においても、「求道」とか「求道者」という言葉があるのは、キリスト教も道というという考え方があったから

道であるイエスさまとともに、進んでいこうではありませんか。

でしょう。  
それでは聖書においてはどうでしょうか。聖書の世界においても、道という  
言葉がたとえとして用いられている箇所があります。「あなたのみことばは、  
私の足のともしび、私の道の光です。」(詩篇 119:105)にある「道の光」と  
いうのは、「人生」の暗い道あるいは「自分の信仰生活」を意味しているでし  
ょう。そして、今朝学んでいる箇所、イエス・キリストは「わたしは道です」と  
述べられました。ここの、「道」というのは、一つにはそのような面、すなわち、御  
国へ続く道というイメージが語られていると考えられます。つまり、キリストをた  
どっていけば、目的地の父の家に着けるといいう道です。次に「わたしは門です」  
というお言葉と比べてみましょう。門はそこを通過すれば、恵みの世界に入る  
わけですが、「道」という時には、父の家へとたどっていくのです。つまり、道を  
たどって行く事に主眼があるのです。「キリスト道」というとわかりやすいです。  
父の家に着くまで、イエス・キリストを学んでいく、知っていくことによって、救  
いを受け、御国への道を進んでいくことが強調されているのです。ここには、「わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることは  
ありません。」ともあります。御国への道を進み、まことの神と出会うには、キリ  
ストというお方を知っていくことが重要です。私たちは心を騒がせやすいので  
す。だからこそ、キリストなる神を信じて進むのです。道の途上でなすべきこと  
は、御言葉を熱心に学ぶことです。そこに啓示されたキリストを知りたいので  
す。この方を礼拝することを重んじ、祈りや賛美を通して、主との霊的交わりを  
していきたいのです。道であるイエスさまを通して恵まれつつ、御国への道を